

5 分間ドリルは学習習慣の形成に有効か？

金 井 健

長野救命医療専門学校 救急救命士学科

Is a 5-minute drill effective in forming learning habits?

Takeru Kanai

Nagano paramedical college

要旨：教育機関の重要な責務として基礎学力の向上という重要な課題がある。基礎学力を向上させようとする試みは沢山行われているが、現状においてその効果は十分とは言えないように感ずることがある。学問を身に付けるための手法として最も基本的な方法が授業である。良い授業をするための適切な指導技法を選択することは難しい。そこで、今回は、学習習慣を向上させるための手段として「5分間ドリル」（以下「ドリル」という。）を実施した。「ドリル」の「ねらい」は、学校外（家庭等）における学習の有無（予習・復習）について、その実態を検証することである。実施方法は、44コマの授業の始めと終わりの5分間を利用して88回の「ドリル」を行った。「ドリル」の内容はテキストの文章をそのまま問題として作成し、予習、復習の度合いを点数化するものである。得点を集計することによって学生の努力と実力を客観的に検証することができた。また、数値により「見える化」することで予習や復習が行われているか否かの判断も、ある程度は把握することが可能となった。「ドリル」の効果については前期定期試験やアンケート調査からも推測できる。「ドリル」は強制的な手段ではあるが、テキストを反復練習することでその効果は大いに期待できることが分かった。今回の試みは、対象者も多く精度的にも信頼性は高いと考える。従って、学校外（家庭等）における学習習慣や学習環境を改善する対策の一環として、また、授業展開における指導技法の一手段として「ドリル」は有効であると考えられる。

キーワード：ドリル 学習習慣 学習意欲 学習環境

1 はじめに

「勉強は好きですか、嫌いですか。」「自宅での勉強時間はどれくらいですか。」本校の入学試験で受験者に対する質問事項である。質問に対してははっきりと「好きです。」と答える受験者は少ない。また、家庭での勉強は殆どが1時間前後と答えている。

勉強は「質」と「量」が関係していると言われていいる。勉強の「量」を増やしても「質」が悪ければ実力は身に付かない。学校における勉強と、家庭における勉強は非常に重要であると教育の専門家は語っている。「努力」とは何か。「努力」とは、「目標実現のために心身を労し努めること。」と記されている。

今年も沢山の新生が入学し、令和3年度がスタートした。将来の目標に向かって専門学校に入学したからには、それなりの気概を持って「努力」を継続して欲しいと願っている。しかし、目標があるにもかかわらず、目標に対する職業理解や計画性が感じられないのは何故だろうか。夢を勝ち取った例と言え、ば、「努力は報われるんだと思った。今すごく幸せ。」水泳日本選手権で優勝したアスリートのインタビューが記憶に残る。東京オリンピックを目指し、ひたすら「努力」を重ねていたある日、突然の病が若きアスリートを襲った。白血病を患い2年。それでも、崩れ

そうなる「心と体」を支え、支えられて日々の努力があった。とメディアは伝えていた。嗚咽と涙の笑顔が苦しい闘いを物語る。病に倒れても尚、日々の努力を怠らなかったアスリートの精神に学びたい。今回は、家庭における学習習慣の有無と、強制的な方法を用いた「ドリル」の効果について評価を試みた。

2 ドリル得点の評価について

第1回から第44回（計88回）の予習・復習ドリル結果は以下のとおりである。（抜粋）

表1

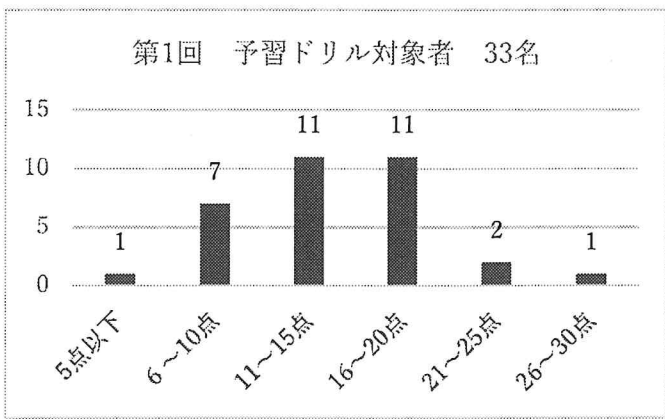


表2

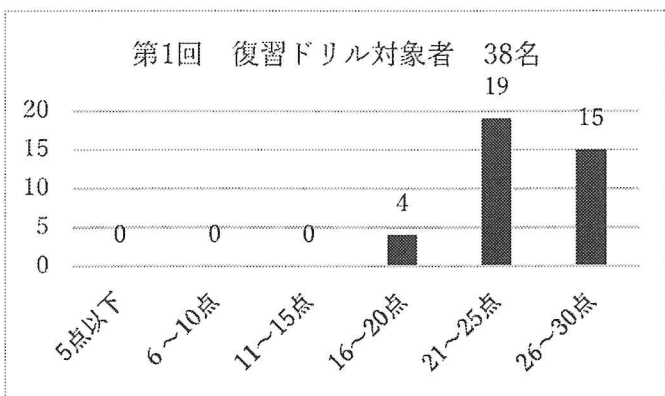


表3

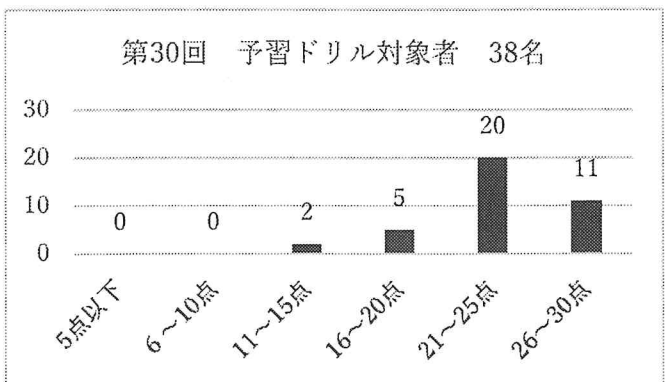


表4

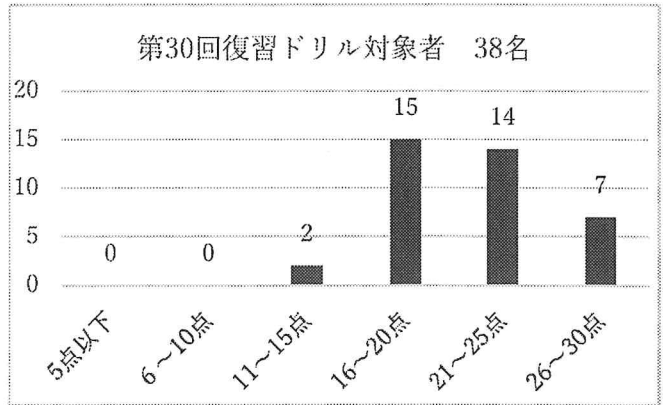


表5

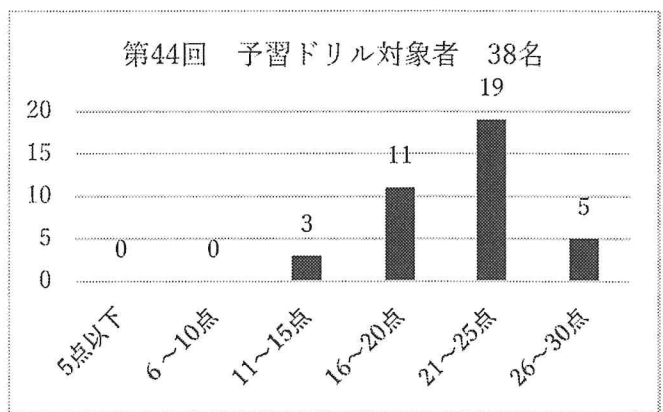
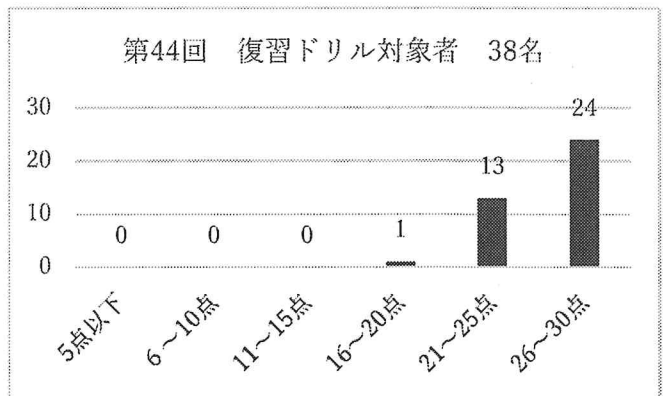


表6



今回、実施した44回（計88回）のドリル得点評価（見える化）による結果としては次のような傾向を示した。

1. 予習問題第1回と第44回の結果を表1と表5に示す。グラフを比較すると効果は概ね良好であった。しかし、約28%で改善が見られなかった。
2. 復習問題第1回と第44回の結果を表2と表6に示す。グラフの比較では明らかな右方移動がみられた。

3. 5月の連休及び夏季休業後の得点は中弛みの傾向を示した。
4. 前期定期試験の得点結果と第44回（計88回）予習・復習問題の得点結果は概ね相関していた。

3 ドリルに関するアンケートについて（抜粋）

救急救命士学科第16期生37名についてアンケート調査を実施した。37名の承諾を得たので、アンケートに関する内容の一部を記載する。

（原文）

1. 自宅学習のきっかけとなった。
2. テキストを読む回数が多くなった。
3. ドリルはテキストの内容と同じであり定期試験に役立った。
4. ドリルで間違えた個所を重点的に勉強できた。
5. 予習・復習プリントの実施は自分の身に入りやすく非常に良かった。
6. ドリルを中心とした授業は良かった。
7. テスト形式の授業は教科書を読み、理解できているか確認することが出来て良いと思う。
8. 予習・復習で2回同じプリントをすることは個人的には良かったと思いました。
9. 毎時間のテストが自分の知識として頭に入りやすかった。
10. プリントを使った授業は良かった。そのプリントを使い復習が出来やすかった。
11. 小テストを繰り返し行う事で「何度もテキストを読んだことになる。」というやり方はとても良かった。
12. 日々の授業でしっかりやっていたらテストもできるし、プリントの制度は良かった。
13. 授業の時やっていたプリントのおかげで大事なところが頭に入ってすごく役立ちました。
14. 授業で何回も問題を解いたので覚えやすかった。
15. まず、授業が始まって〇×式の予習、復習テストがあったことで教科書を読む回数が増えた。
16. 確認テストは教科書通りの内容なので、自分の苦手な部分の発見にもつながると思う。
17. 予習、復習のプリントがあることで何回も教科

書を見返すことができた。

18. 授業の最初と最後にやった確認テストは自分でできていない所を判断するのに役立った。
19. 授業の最初に行った予習、復習のプリントのおかげで教科書の内容を覚えることができた。
20. 小テストを毎回やることはとても予習、復習につながるのととても勉強になった。
21. テスト形式の小テストは私はとても勉強しやすいです。なので継続してくれるとうれしいです。
22. 小テストを繰り返し行い、わからなかった所は理解できるまで教科書を読んで、テストではいい点をとることができた。
23. 小テストをすることによって頭の中に入ってきやすかった。沢山覚えれたしとても良かった。
24. 授業の前と終わりにあるプリントのおかげで予習と復習の習慣ができた。これかもずっと続けたいです。
25. 面白かった。

他にも「ドリル」についての意見は種々あったが、上記と同様の記載が多かった。

「ドリル」に対するアンケート結果から、「ドリル」の実施は、学生評価においては効果的であったと判断できる回答が多かったと感じている。

4 考察

ドリルの実施とアンケートからみえたこと。

1. 自宅学習のきっかけとなり得た。
2. テキストを読む動機付けとなった。
3. 学習習慣・学習意欲の動機付けとなった。
4. 予習・復習の重要さを理解するきっかけとなった。
5. ドリルの数値と定期試験の成績は相関していた。
6. 長期休業後の得点は一部の学生を除いて中弛みの傾向が強くみられた。このことに対する改善策として、次回の長期休業からは課題をもって対処したいと考える。

今回実施したアンケート調査は、定型的なアンケート調査ではなく、感じたままを記載する自由なアンケート様式であり、「ドリル」に対する一人ひとりの考え方が伝わってきたように感じている。

よって、個々の数値やアンケート結果から勘案すると、初期の目的は達成できたものとする。しかし、約 28%の学生に対する改善策については今後の課題としたい。

これらのことから、「ドリル」の実施について総合的な判断をすると、授業時間以外の学習習慣（家庭等）や学習意欲の醸成に対して、ある程度の有効性は得られたものとする。

5 おわりに

テストの点数が悪いのは学校が如何に効率の悪い教え方をしているかを示している。学校本来の仕事は、家庭での勉強時間を増やすことではない。良い学校というのは、家庭にまで勉強を持ち込まずに済む学校だと思ふ。これらは、教育研究家の新聞記事である。

他方の意見として、勉強は「質」と「量」が関係している。との論もある。ゆとり教育が指摘されて久しいが、このような考え方は「脱ゆとり教育」から考えてみると大いにかけ離れているように思える。どちらが教育にとって良策なのか。学生の勉強に対する意識が希薄化する状況下において、学習意欲を向上させる画期的な解決策を模索することは、教育機関に限らず難問であることに異口同音である。

やる気があれば、目標があれば、大抵の夢は可能となるであろう。例えば、病と闘いながら、入院中であっても筋力トレーニングを続け、目標を勝ち取ったアスリートもいる。これは、スポーツ界の良い事例である。挑む世界は違っても、目標を勝ち取る姿勢は、常に前を向く積極的な努力が必要である。そのことを学生自身が理解しなければ、目標を達成することは不可能と考える。勿論、勉強は自発的にすべきことではあるが、それを補佐する対策も必要ではないだろうか。例えば、家庭においては**勉強がしやすい方法や、環境を整えることも重要な要素**と考える。今回の「ドリル」実践は反復訓練をさせるための手法ではあるが、いわゆる「見える化」に対する試みとしては良好であったと考える。しかし、教育研究者の教育方法とは大いに異なる手法であり、今後の検討が必要である。

教育機関が糧とするものは何か。本音と建前をどの

ような形で解決させるべきか。ディレンマである。

昨年は COVID-19 による感染防止の「徹底」によりインフルエンザ感染は激減したと報告されている。この事例から学ぶことは、やるべきことをしっかりと徹底すれば結果は残る。学校生活もやるべきことをしっかりと「徹底」することが、学力を向上させる最大の基本的な行動であるとする。

東京オリンピック・パラリンピックが終わった。インタビューでは「**地道な努力**」の結果と語るアスリートが多かった。幾つかの名言中「家族みんなで取った金メダルだと思う。」「無欲は怠惰の基なり。」などと語っていたメダリストの言葉が心に残る。本校教育目標には、医療等に携わる者として「**確かな専門性**」「**豊かな人間性**」を兼ね備えた学生を育成する。と記されている。

目標を果たすためには、それぞれが、それぞれの目標に向かって「**地道な努力**」を継続していくことが重要である。何事においても環境を整備することは重要である。「**甘えない。**」「**甘えさせない。**」「**諦めさせない。**」という環境を作り、「**韋編三度絶つまでテキストを読む。**」そんな学生集団を、どの様な方法を用いて導くべきか。課題解決への道程は未だ模索の途中である。

終りにアンケート調査に協力して頂いた 16 期生の学生諸君に感謝します。

受理日：2022年3月23日